

青年僧よ 立ちあがれ、歩め!!

発行所
 臨濟宗青年僧の会
 発行人 藤原東演
 〒420 静岡市御幸門11の4
 TEL 0542-51-1312
 〒振替 横浜 2-16960

不 二

主 記 事

- * 生涯の杖
- * 如の世界
- * この人この道
- 東井義雄
- * 生き活き寺院
- * 寺興し

☆小僧に行く
 私は十四歳の時六年を卒業して豊橋の正宗寺へ小僧に行きました。その時はお寺の話もろくに聞かず、「行け」と言うので行きました。正宗寺は人家から八丁ぐらい山奥へ入った所にあり、参道には太い杉が聳えていて空を見ても星が見えないくらい鬱蒼としていました。師匠は寺の副住職で南禅寺に在錫中でしたので寺には隠居さんと世話をする尼僧さんと人力車夫の三人しかいませんでした。副司寮は通いの和尚がしていました。しかも学校は、村の子供と遊びがちになるといので、よその村の学校へやられたので距離がうんとあり、苦勞しました。そんな訳で私は、寂しくて寂しくて居ても立ってもおれませんでした。たまらなくて朝、学校へ行くと言つてそのまま実家へ帰つてしまつたのです。

☆不返転の決心
 深く考えもせず親は叱りもしないと思つて、「おい帰つたよ」と帰りました。すると私に一遍も怒つたことがなかった親父が、厳めしい顔をして、「何で帰つて来た、いいお坊さんになれと送つてもらつて三日も立たずに帰つてくるとは何ごとだ!!」とひどく怒つて家へ入れてくれませんでした。私はびつくりして途方にくれてしまひました。そこが母親で父親に隠す様にして家に入れて一晩泊めてくれました。父親に「魚屋でも洋服屋でも一遍小僧に出した以上は、家へ帰さないから覚悟をしとけ」と言われて、お婆さんの横へ寝かされました。魚屋や洋服屋よりお寺の方がいいと思ひ私は明るく日帰りしましたが、その時、あれほどひどく怒つた父親が、私に隠れて手を合わせて涙をこぼしておつたのです。私はそれを見て「あーっ」と痛感しました。「これはもうお坊さんにならなにかんわ、もう帰つて来ないわ」と思ひました。あの姿を見なかつたらどうなつておつたかわかりません。その姿は隠れて私を拝み謝つておりました。それを見て、「坊さんになるんだ」と決心出来たのです。

☆宗門安心章の編集
 私は昭和十五年に臨濟寺に行き十八年に住職し、二十四年に僧堂が開單できました。その後、高等布教の講師をやつた頃、何か読みやすいものを作ろうという話が内局で始まり、その起草委員に無文老大師と伊藤古鑑先生と私の三人が挙げられました。月一回集まり、



した。『宗門安心章』の第二章自覚安心と第三章行事仏道の二編のようなもの、教義の基本として作らなければなりませんでしたが、第一章信心帰依のような在家にわかるものを入れるかどうかということが問題でした。心安くしていた南禅寺の故寒松軒老師に伺つたりしました。

☆在家の為の安心章
 やはり『在家安心章』としては、「ただ悟れ」でははじまりません。そういうものを入れなければわからない、と言つた所、無文老大師も伊藤先生も賛成してくれて、あの第一章が入つた訳です。それで伊藤先生にお願いして案文を作つてもらひ、無文老大師が手を入れました。私も拝見させて頂き、昭和四十年に『宗門安心章』が出たのです。自分等の作つたもので何だか気が引けて人に読むことを勧めるのに遠慮していましたが、本山ではこの『宗門安心章』がほとんど使われておるので、打ち込まなくてはいけません。それで私は管長にでるとの間、皆さんにこれを読んでもらおうと思つて提唱はどこへ行つても『安心章』です。

私が今日まで来れましたのも因縁に恵まれ周囲の人に恵まれたおかげです。お互いどんな因縁も疎かにせず、精進してゆきたいものです。

(文責編集)